



〔自伝小説〕

わが道を求めて (第十回)

双溪小学校入学の頃

長崎 明

さしえ 竹内 秀明

双溪は私が五歳から十歳まで育った所で最も思い出が深い。盲導犬を育てるには、幼犬の頃、やさしい飼主のもとで、うんと甘やかされて、のびのびと過ごした後、訓練所に入れられ、びしびしと教え込まれ、鍛え上げられるのだという。もしも私を盲導犬に例えるならば、双溪時代が「のびのび」、台北での小、中学時代が「びしびし」ということになろうか。双溪と台北とがあったからこそ、今日の私がある、とさえ自分では思っている。

双溪での父の活躍

一九二九年（昭和四年）三月、父は基隆郡双溪公学校訓導（教頭）に栄

転し、私達一家は五堵から双溪へ転居した。

五堵は同じ基隆郡とはいえ、基隆・台北間を結ぶ主要幹線鉄道の沿線にあり、田舎ながらも駅前のも、それなりに立派な官舎に住んでいたが、双溪は、五堵から基隆に向かつて、六堵、七堵を経て八堵で宜蘭線に乗り換え、以前に勤務していた四脚亭のそのまた東方、いわゆる三貂嶺さんびょうりやうの向う側、間もなく太平洋岸の澳底あうていに着こうというあたりにある小さな僻村へきむらである。それでも、渡台して僅か四年、年令二六歳の若さで教頭として腕を振るうことができるようになった父の大活躍が始まった。

この公学校には砥上とがみという校長先生以下六、七人の先生がいて、台湾の子弟一〇〇人ほどを教えていたので、その教頭ともなれば、それなりの忙しさであったろうが、父は、学校とは別に台湾青年の教習所の指導員を勤め、社会教育にも力を尽くした。そして、青年団活動をドラマ化して、青年団員によるラジオ放送を実現させた。ラジオドラマがまだ珍しかった時代に、田舎の教師が、地域の台湾青年を組織して、ラジオ放送するには、余程の努力と才能が必要だったに違いない。父はまた運動神経も卓抜していたようで、青年団員に団体操を教え、台北州の体育大会で第一位を占

めたりしている。

さらに驚くべきことに、「双溪音頭」と題する村民歌を、作詩、作曲、レコード吹き込み、踊りの振り付けまでやって、村中に普及させた。私達も学校の運動会や村のお祭りの時に良く唄ったものだった。記憶のまにまに歌詞を書いてみよう。

双溪音頭

ハア 橋を渡ればチラリと見える

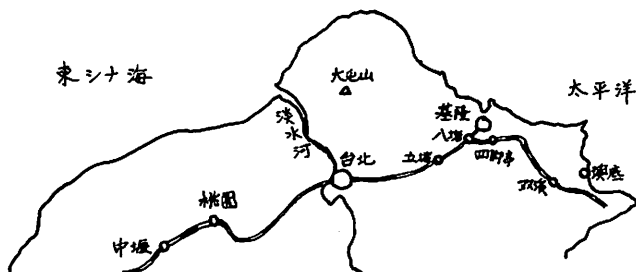
昔懐し御遺跡所 ソヨネ

キラリ川瀬に鮎も遊ぶ

ソオン ソオン 双溪 良い処とこセ

ソオン ソオン 双溪 良い処とこセ

これは一番で、四番くらいまであったようだが、二番以下はどうしても思い出せない。一九八〇年（昭和五五年）、父の喜寿を祝って村松に一家が集まった折、皆で思い出しながら唄ってみたが、結構、みんな、ふしも覚えていた。私も今、ふしをつけて唄いながら書いてるので、五線紙にオタマジャクシが並べられれば、ご紹介できるのだが、父と違って、私にその才能がないのが残念である。



台湾北部見取図

この歌詞の中の「ハァ」の^はで^はは、東京音頭とは一あじ違^いった旋律を持っていて、異国情緒の、それでいて、また波味のあるのが父の得意で、そのところだけ何度も繰り返させられたものである。「ソヨネ」の^ほ子^し言葉もさることながら、「ソオソ、ソオン 双溪」の言い回しとその繰り返し

は、まさに独創的である。「チラリ」と「キラリ」の対比も、なかなか妙味がある。

ところで、この歌詞には、一つだけ、たいへんな問題がある。「御遺跡所」が「チラリと見える」のくだけりである。その当時、この言葉がよくも不敬罪にならなかったものである。

御遺跡所

「チラリ」という表現には、何か軽妙洒脱^{しんたう}な響きがある。横目でチラリとのぞく、白い襟足がチラリと見えるの類で、セクシーでさえある。そして、見えるのが御遺跡所である。この御遺跡所こそ、日清戦争によって割譲された台湾平定のために、天皇の名において近衛師団を率い、台湾に派遣された北白川宮能久親王の宿泊跡なのである。

日清戦争によって日本に割譲されるはずだった遼東半島は、清朝の強い反対が三國干渉を招いて、日本は涙を飲まざるをえなかった。かわって、台湾、澎湖島^{ほうこ}の割譲要求はあっさり認められ、一八九五年（明治二八年）四月一七日に、講和条約が調印された。しかし、驚いたのは台湾の人達だった。二千キロも離れた北辺

での戦争に負けたことが、なぜ台湾割譲に結びつくのか、しかも日本は東夷の一つで、弁髪、纏足、アヘンを禁ずるといふ。台湾は昔から「イラ、フォルモサ（うるわしの島）」とポルトガル語でよばれてきたほどの豊かな美しい島なので、その領有をめぐる幾多の確執があり、独立運動も根強く続いていた。そうした歴史的民意に推された形で唐景崧を総統とする台湾民主国が五月一〇日樹立された。強く独立を求めて抵抗すれば三国干渉のような動きを助長できるかも知れぬとの期待があった。

台湾接収と鎮定を急ぐ日本は、本来は満洲戦争に向かうべく冬支度で待機していた近衛師団を、急ぎ台湾に南下させ、五月二九日、台湾側の意表を衝いて、基隆の背後澳底に敵前上陸させた。当時の日本陸軍七個師団の三分の一以上、連合艦隊の大部分を投入しての大作戦だった。六月一日、双溪に結集した近衛師団は三貂嶺の險を越えて三日基隆を、七日台北を占領した。師団はさらに南下したが、南部ではかなり強い抵抗にあったため、五カ月後の一〇月二二日ようやく台南に入城、ほぼ全島支配に漕ぎつけた。しかし、師団長の北白川宮能久親王は一週間後の二八日マラリヤで逝去した。台湾人によって殺されたと伝

えられ、反日感情の強さを象徴するものといわれた。

台湾総督は、台湾統治に関する限り、立法、行政、司法の三権を一手に納める強大な権限を持ち、植民地支配を強硬に推進したので、表面的には治安が回復したかに見えながらも、武力、政治、経済にわたる執拗な抵抗がその後数十年にわたって継続し、日本政府と台湾総督府を苦悩させた。さらに、一九一七年のソビエト革命、一九二二年の中国共産党創立は台湾民衆にも大きな影響を与え、一九二八年四月には上海で台湾共産党が結成された。満洲で張作霖が爆殺されたのもこの年で、一九三一年満洲事変、一九三二年上海事変、満洲国成立へと、日本の中国侵略戦争が拡大の一途をたどった。

私達一家が双溪での生活を送った五年間（一九二九年―一九三四年）は、こうした重大な転期に立つ時期であったが、当時の私には知るよしもなかった。

北白川宮能久親王のゆくさきざきに御遺跡所が設けられ、やがて台湾神社に祀られることになり、台湾統治の神様として崇め奉られるに至った。双溪の御遺跡所は宜蘭線双溪駅の近く、双溪川を小さな木橋で渡った川向うにあった。それは、二部屋ほどの小さな土造の家だった。だから、父は「橋を渡ればチラリと見え

る」とうたったのだが、考えれば大胆な表現だったのに、何のともがめもなかったのは、台湾のごく辺境の地だったので見落とされたのかも知れない。台湾では内地人に対しては万事おおらかだったようである。台湾人に対しては一九三一〜三三年にわたる大弾圧があり、一九三七年皇民化運動推進、漢文さえも禁止される時代を迎えた。日本語を日常的に使うことが奨励され、「日本語の家」と書いた日の丸付きの標札が、台湾人の家の玄関に掲げられていたのを、私も覚えていた。(以上、史実については、王育徳『台湾、苦悶するその歴史』昭和六〇年、弘文堂発行による。)

小学校入学の頃

五堵では立派な官舎があったのに、双溪には官舎がなくて、はじめの一、二年は、台湾人街の中にある狭くて暗い家だったように記憶している。土造か木造かは覚えていない。表玄関から裏の台所まで細い廊下のような土間があって、その土間に面して三つ、四つの部屋が配されていた。台所から裏庭に出ると井戸があって家事用水に使われていたが、飲み水は必ず沸かさなければならぬような感じだった。井戸の周りにニ

ワトリやアヒルが遊んでいたように思うが、うちで飼っていたのか、他家から入って来たものか、忘れてしまった。庭といっても、五堵に比べれば猫のひたいくらいのもので、台湾の人の家の庭とつながっていたような気がする。植木もなかった。

満五歳の春、双溪に転居したので、翌年四月には小学校入学だというわけで、勉強の準備をはじめた。「させられた」という感じではなく、「自発的にはじめた」と自認している。父が小学校一年の国語と算術の教科書を持って来てくれた。公学校と小学校とは別々のところに建っていたが、小さな村なので、それに、内地人は公学校と小学校の先生が大部分で、互いに良く知り合っていたので、たやすく手に入ったであろう。

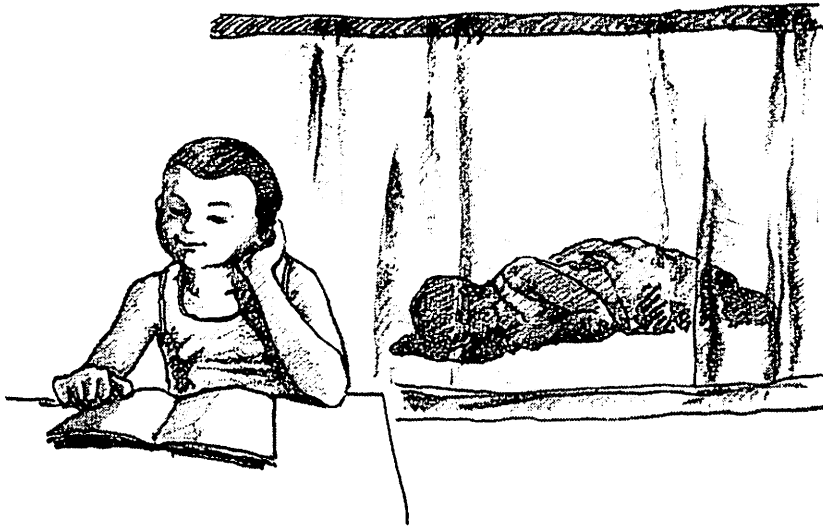
国語の教科書は例の「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ、カラスガイマス、スズメガイマス」という本で、数年後に「サイタ、サイタ、サクラガイサイタ。スズメ、スズメ、ヘイタイ、スズメ」に変わった。

玄関に入って二番目あたりが私達三人(私、妹、弟)の部屋になっていて、夏は蚊帳を吊るので暑苦しかった。朝早く蚊帳を抜け出し、一人出窓に這い上がり、あぐらをかきながら、その教科書を開いた。国語の教

科書を読むというより、暗誦してしまっただけ、ながめながめ、口の中でブツブツ言ってるだけ。それを毎朝のようにやっていた。母が朝食の支度に起きて来て、「おや、もう勉強してたの」といわれると、得意満面であった。

世間では、「小学校にあがる前の一年は利かん坊で暴れん坊で、親の言うことなんか聞くもんでない」とよく言うようだが、私は身体が小さかったためか、妹弟のほかに遊び友達がいなかったためか、何となく本を開いていることが多かったようである。字を書くのはどれくらい出来たのか、全く記憶にないし、算術の足し算、引き算なども、どの程度勉強したか覚えがない。窓辺でただ本を開いているのが好きな子どもだったようだ。父は例によって飛び回っていたし、母はその父と子ども三人（五歳、四歳、一歳）を抱えての家事に追われていたので、父母とも、それほど勉強を教えにくれる時間的余裕がなかったに違いない。だから、本が好きなのは生まれつきというほかない。

この家で、もう一つ、忘れられないことがある。ある日の夕方、台所で母の切り裂くような叫び声があった。とんでいってみると、石油コンロが真赤な炎をあげて燃えているではないか。その炎はもう少しで天井まで



届きそうだった。天ぶら鍋にコンロの火が入ったのであるうか。母は「アレー、アレー」と叫ぶだけで、何の手もほどこしようがない。周りに台湾の人たちの家があっても、助けを求めるほどには近くない。私たちの子どももオロオロするばかり。

その時、突然、玄関に父の声がした。「どうした」というなり、土間を駆け抜けてきた父は、ぼうぼうと燃えさかる石油コンロをいきなり両手に持ち上げ、裏の庭に放り出してくれた。それはまさに、あつという間の出来事だった。火のついて石油コンロをのっしのっしと持ち運ぶ父の姿はまるで仁王様のような感じだった。父は何かの用事で、いつもより早く帰って来たのだが、それがもう一瞬遅かったら、多分大火事になっていたに違いない。父の腕の手当をしながら泣きじゃくる母と、大声でどなりつけながらも母をいたわる父、その周りを跳びはねる三人の幼児の姿が、今でもまぶたにやきついている。

父の両腕の内側の皮膚は今なお黒ずんでいる。

丘の上の小学校

双溪尋常小学校は街から少し離れた小高い丘の上に



あった。木立ちの間を縫うように石段を登ると、道の両側に答むした石の門柱が立っていた。一まわり一〇メートルほどの狭い運動場を越えると、木造平屋で三教室ほどの校舎があった。

全校生徒一八名、先生は校長を含めて三名、一年生から三年生までの下級組と四年生から六年生までの上級組の二クラスだけ。私は、一九三〇年（昭和五年）四月、一年生に入学してから四年間をこの小学校で学んだ。そのことを私は生涯の誇りとさえ思っている。

最近、小、中学校は、行財政上の都合から「大きい

ことは良いことだ」とばかり、むやみに統合が進められ、小さな学校は廃校の憂目をみているが、小規模学校の良さ、とりわけ上級生、下級生が一クラスに混じり合う複式授業の良さは見直されて良いのではなからうか。特に、私のように、身体が弱くて小さくて、泣き虫で、運動神経の鈍い子どもには、持ってこいの、おあつらえむきの学校である。

私はその小学校に一歳年下の妹と一緒に通った。一緒に通っていても、実は妹に手を引かれて、とぼとぼと通ったのである。五堵ではあれほど屋外で遊んだ私が、双溪ではすっかり臆病になって、小学校入学もちっとも嬉しくなかった。とにかく他人の前で何かやらされるのが大嫌いだ。

顔色の悪い瘦せた私と対称的に、妹はタテ、ヨコとも私より大きく、顔色も陽焼けて、見るからに丈夫そうで、また活発な女の子だったから、皆に可愛がられた。父の喜寿祝いの自筆メモによると、妹は「色の黒いのをひがんでいた」とあるが、とてもそんな風ではなかった。小学校入学前から、私がいじめられて泣いていると、「よし、よし、兄ちゃん、泣かないで」となぐさめてくれた。

そんな妹だったので、母は、私のおもい役として、

また時には護衛役として、さらには、来年は小学校に入るのだからといって、妹を私と一緒に通わせただった。

自分の身体よりも大きな鞆を背負った私は、石段を登るのがやっとで、妹に手を引かれてどうやら校門にたどりつくのだった。

良く泣いた私

幼児の頃、私は「あき坊」と呼ばれていたが、あまり泣くので「泣き坊にしちゃうよ」といわれて、また泣いた。石焼いものおじさんが、「ヤキモー」といって売り歩いているのが、「泣き坊」に聞こえて大嫌いだ。台湾では、さつまいもが広く作られていて、ふかしたり、焼いたりして良くおやつに出されたが、私はあまり食べる気がしなかった。

とにかく、泣いてばかりいた。朝食時、母が忙しかって、ついうっかり私のところだけ箸を置き忘れていたのに、「ぼくにも箸をちょうだい」といえなくて、めそめそと泣き出す。当時、生卵は貴重品で、めったに口に入らなかったが、たまに卵一つを子ども三人で分けなさいということで、弟、妹と最後に私のところ

に回ってきたら、白味のドロドロしか残ってなくて、それでまた泣き出す。鞆の中に学用品をつめている時、筆箱の鉛筆が一本足りないのに気がついて泣き出す。私の泣き方は、まず涙がポロポロ出て来て、それから口が右の方にゆがんで、次にのどの奥からしぼり出すように、クックツツと声ならぬ声をあげる。そのうち、涙がクスンクスンと出て来る、といった順序である。別に自分で泣きたいと思つて泣くわけではなく、何か意に添わぬことがあると自然に泣けてくるのである。口に出して物を言つたり、手や身体を動かして意志を示せば良いものを、それをやろうとするより早く泣けてくるのである。

小学校では、忘れ物をしては泣き、足し算が判らぬといつては泣き、小便をちびつては泣き、同級生に突つかれては泣き、泣く材料には事欠かなかった。家へ帰つて、妹が「お兄ちゃん、今日は三回泣いたよ」と母に報告するのを聞いても、別に気がとがめるわけでもなかった。

これは、今年三月、定年退官の最終講義で述べたことだが、小学校あがりたてのある日、こんなことがあつた。

下級組の担任は小山先生という若い独身の女性だつ

た。色白で細長のスラリとした先生で、めつたに叱るようなことはなかった。その日は、何か先生もご機嫌が悪く、私も虫の居所が良くなかつたのか、いつになく泣きじゃくり、なかなか止めようとしなない。とうとう授業の邪魔になると、校庭に出されてしまった。校庭の隅で一人泣いていると意地でも止められなくなつて、一時間もしゃがんで泣いていた。そのうち、涙と涙が混じり合つて、鼻先から地面まで届き、校庭の土を湿らせた。その湿つた土を指でこねているうちに、何となく気持が落ち付いてきて、泣き止んでしまつた。

これが私と土との最初の出会いだと述べたら、学生諸君から笑い声が起こつたが、これは決してフィクションではない。校庭で心ゆくまで泣かせてくれた小山先生を懐かしく思い出すこともある。

(ながさき あきら) Ⅱにいがた県民教育研究所会長・新潟大学名譽教授)

